

『フランケンシュタイン』 明治中期の初邦訳—
「新造物者」の底本をめぐって

中 川 僚 子

The First Japanese Translation of *Frankenstein* in the Mid-Meiji Era: Identifying the Base Text

The first Japanese translation of Mary Shelley's *Frankenstein* was "Atarashiki Zoubutsu-sha" ("The New Creator"), serialised in the magazine *Kuni no Motoi* [Foundation of the Nation] from June 1889 to March 1890. Questions on the translation abound, starting with its unidentified translator and its unexpected curtailment. This paper addresses two essential questions surrounding "Atarashiki Zoubutsu-sha." The first question is why *Frankenstein* was chosen for translation. Shelley's novel was "almost completely out of print" in the 1850s through 1870s, and her literary reputation was not established until the late twentieth century. The second question is which edition and which text the translator used. This paper will examine how the popularity of Shelley's text survived and prospered in mid- to late-nineteenth-century England thanks to stage adaptations and cheap editions aimed to enlighten the lower-middle and working classes. It will also demonstrate that Routledge's World Library (RWL) edition of *Frankenstein* was likely the base text for "Atarashiki Zoubutsu-sha" by focusing on the cuts and other changes made in the translated text. The paper also includes a brief discussion of its unidentified translator.

1. 「新造物者」をめぐる三つの謎

メアリ・シェリー『フランケンシュタインあるいは現代のプロメテウス』(Mary Shelley, *Frankenstein; or the Modern Prometheus*, 1818)の研究は、21世紀になってさらなる活況を呈しているが、人口に膾炙した固有名詞を冠するこの小説の日本における受容の第一歩を記したのが、明治中期に出版された初邦訳「新造物者(あたらしきぞうぶつしゃ)」であったことはあまり知られていない。原作からおよそ70年後に出版された『新造物者』については基本的な情報が不足しているというのがその主な理由である。⁽¹⁾

比較的知られていることといえば、『國のもとゐ』が、東京高等女学校の教員が中心となって刊行した新しい女子教育を標榜する定期購読誌であったこと、「新造物者」のほか、小金井貴美子(翻訳家、森鷗外の実妹)がアンデルセンの「王宮」の翻訳を発表した媒体でもあったことの二つであろうか。「新造物者」が雑誌『國のもとゐ』に連載され始めたのは、明治22(1889)年6月のことであったが、連載は、明治23(1890)年三月に掲載誌の突然の廃刊とともに中断した。途中、明治22年12月から翌年2月までの3ヶ月間は休載されたため、出版されたのはわずか7回分の連載にすぎず、原作の全訳にはいたらなかったことも、「新造物者」が顧みられることが少ない原因の一つと思われる。

本稿においては、原作『フランケンシュタイン』の複数の版の出版史および舞台化の歴史を確認した上で、1880年代にロンドンのラウトレッジ社から出された簡約版が「新造物者」の底本である確率が高いと推定される根拠を明らかにしたい。異文化交渉が急激に展開した明治期日本における文化的・社会的文脈の解明に向けて一つの道筋を探ると同時に、イギリスと日本を舞台とする近代化の様相、さらには原作についての新たな読みの可能性の追究につながることを期待している。

「新造物者」をめぐっては基本的な情報が不足していると述べたが、そのうち、特に主要と考えられる未解決の情報は次の3点である。(1) 狐廬舎

主人（ひさごのやしゅじん）と名乗る翻訳者の正体、(2)原作が文学的評価を得るにいたるはるか以前の19世紀末において、『フランケンシュタイン』が『國のもとゐ』に翻訳すべき作品として選ばれた理由、(3)連載が途中で断絶し、翻訳が終わらないままに『國のもとゐ』が廃刊となった理由である。以下、それぞれの項目について、概略を述べておきたい。

上記(1)の翻訳者の正体については、特定するに足る決定的な証拠は未だ出ていない。「新造物者」連載のどこにも原作者メアリ・シェリーの名はなく、「新造物者」と掲げられたタイトルの次の行に「瓠廼舎主人（ひさごのやしゅじん）」という名が記されるのみである。同じく『國のもとゐ』に掲載された翻訳でも、小金井喜美子訳の「王宮」の場合は、原作者と併記して翻訳者である小金井の名が載せられており、当時翻訳あるいは翻訳家と原作者の位置付けが定まっていなかった証左を提供している。筆者は状況的証拠から、幕末・明治の外交で活躍した田邊太一の娘であり、「新造物者」発表の前年に小説『藪の鶯』を発表して話題になった田邊龍子（後の三宅花圃）が「新造物者」の翻訳者であったと考えているが、これについては近刊予定の論文に概要を示したほか、現在も研究を継続中で、稿を改めての報告を予定している。⁽²⁾

上記(2)は、英語圏において、出版150年を過ぎてなお文学的評価が定着しなかったメアリ・シェリーの作品が、なぜ初版刊行の70年後、19世紀末の日本において翻訳すべき作品として選ばれたのか、という疑問である。原作の英語圏における文学的評価が確立されたのは、20世紀も後半になってからのことであった。イギリス女性作家に関する研究データベース *Orlando* は、1980年に批評家バーバラ・ジョンソンがジャック・デリダに関するシンポジウムでメアリ・シェリーを取り上げた時点では、この作家は「未開拓の研究トピック」と見なされていたと指摘している。⁽³⁾ この作品が日本に入ってきたのはどういう経緯であったのか。また『國のもとゐ』の編集者はなぜこの作品を掲載しようと考えたのか。これらの疑問に対する答えには、『國のもとゐ』という雑誌の成立に関する日本側の事情と並

行して、「新造物者」翻訳にあたって使用された底本を探すことを通して近づけることができそうである。

上述の通り、「新造物者」は原作の全訳ではない。全7回にわけて掲載された翻訳のうち、最初の6回分は、部分的省略や要約こそあれ、原作第1巻の筋がほぼ章ごとになぞられている。だが、最終回となる第7回目の連載は、原作第2巻を強引にまとめたダイジェスト版になっている。第3巻に至っては、掲載誌『國のもとゐ』自体が廃刊となったため未訳のままとなった。なぜ、そのような不規則な翻訳また発表形態となったのか——これが上記(3)の疑問である。既発表論文において論じた通り、その背景には、『國のもとゐ』の発行母体であった東京高等女学校をめぐる政治的対立があったと推測される。『國のもとゐ』は東京高等女学校の教員が中心となって発行していたが、同女学校は、明治23年3月末をもって新設の女子高等師範学校に統合され、事実上の閉校に到った。それに伴って『國のもとゐ』もまた予告なく廃刊となり、連載小説も途絶したのだ。⁽⁴⁾

本稿では、「新造物者」をめぐる謎のうち、特に(2)に焦点を合わせ、現時点において蓋然性が高いと考えられる翻訳の底本を見つけるまでの過程とその推測の根拠について報告する。その前提として、次の2節および3節では、まず原作の出版史および舞台化の上演史を先行研究に依拠して辿りたい。可能な範囲で新しい情報も補っていく。

結論を先取りして言えば、底本は1880年代に下層中産階級および労働者階級の啓蒙のためにイギリスで出版が相次いだ廉価版の読み物シリーズのうち、ラウトレッジ社から出されたワールド・ライブラリ・シリーズの『フランケンシュタイン』簡約版と思われる。筆者が2017年10月から2018年3月に、ロンドンの大英図書館、オックスフォード大学ボードリアン図書館等において実施した文献調査の結果、その可能性を示唆すると思われる根拠を複数見つけることができた。最後の4節では、同簡約版を底本と考えるテキストの根拠について論じる。

『フランケンシュタイン』はフランス革命終結から20余年を経て出版さ

れた。一方、初邦訳「新造物者」は明治維新からやはり20余年の時期に発表された。70年の差はあれども、両作品の成り立ちには、いずれも近代化そして近代化を推進する啓蒙主義への期待と懐疑がないまぜになっている。

メアリ・シュリーの原作は、SF小説の嚆矢と称されることがあるように、科学の力による生命創造を物語の契機としているが、他方ではこの世に生を享けたものの、醜さのあまり名づけすらされないまま科学者に見捨てられた「被造物」(creature)が復讐鬼と化すというゴシックロマンス的要素に満ちた作品でもある。原作の副題「現代のプロメテウス」は、人間そして動物の屍体を使って人工的に生命を創造した科学者ヴィクター・フランケンシュタインを、ゼウス神を裏切って人間に火を与えたプロメテウスにたとえたものであり、科学的探究心と功名心から生命創造という神の領域を侵犯した科学者が、自らの「被造物」との追跡劇の果てに北極海で悲劇的最期を遂げるアイロニーが壮大に描かれる。

一方、初邦訳作品の「新造物者」というタイトルは、キリスト教の神を意味する「造物主」ではなく、「造物者」という造語を使い、神に取って代わり、生命創造に野心を抱いた人間の顛末を暗示しており、原題における同様のアイロニーが意識されていると言ってよいだろう。原作に大胆な改変を加えた上、半分まで至らずに途絶し、翻訳よりむしろ翻案に近いという面はあるが、以上の意味において、原作と同様に、近代化への分岐点における様々な対立項の結節点ととらえることが可能であろう。原作と翻訳テキストには、異なる時代に、異なる地域で起きながら、いずれも近代化のプロセスの途上で生まれたという共通点があり、その相似性を探る比較文学・文化研究は近代化を振り返る上で意義深いと思われる。

2. 『フランケンシュタイン』出版史

「フランケンシュタイン」と聞けば、箱のような特徴的な額に手術の縫合跡を残し、首の両脇に電極のボルトをつけたハリウッドの俳優ボリス・

カーロフのイメージが思い浮かぶ。今に至るまでのさまざまなく怪物〉の変形は、ポリス・カーロフの特殊メイクの影響を色濃く受けており、この小説が、1931年のハリウッド映画を初めとする大衆文化に支えられて生き延びてきたことを端的に表している。しかし、まだ映画というメディアのない時代に、1818年の初版出版から1889年の「新造物者」の連載開始に到るまでの約70年間、この作品はどのように生き延び、そして遠く日本に到達し得たのであろうか。本節においては原作の出版史の概略を、次節においては戯曲版の上演史について概略をまとめたい。

シェリーによる原作の英語圏での出版史については、ウィリアム・セントクレアの研究とロマン派文学・文化研究に関するコロラド大学のWebサイト、ロマンティック・サークルズ (*Romantic Circles*, 以下RCと略す)の情報が詳しい。特に前者は、1818年から1939年の120年間に刊行された原作各版の出版年、出版社、発行部数、価格を詳細に記録しており貴重である。以下では、セントクレアの著者に依拠しつつ、いくつか新しい情報を補足したい。

『フランケンシュタイン』には初版、第二版、第三版があるが、匿名で1818年にラッキントン社から三巻本として出版された初版は、500部ほど印刷されたに過ぎなかった。⁽⁵⁾ 同年、同じく匿名で出版されたウォルター・スコットの『ロブ・ロイ』が、初版から1万部印刷されたのとひきかえ、いかにもささやかな始まりであった。⁽⁶⁾ その後、ウィットイカー社から1823年に出された第二版も出版部数は500部と推定されている。1831年に出版され、ベントレー社のスタンダード・ノヴェルズ・シリーズに口絵つきで収録された第三版は、発行部数が大幅に増して印刷された。初版3500部の後、1832年、1836年、1839年、1849年に、それぞれ500部、500部、750部、1000部の増刷をしたことが知られている。しかし、初版、第二版、第三版を合計しても、7000部強にしかならない。その後の1850、60、70年代について、セントクレアは「著作権によって保護されていたものの、ほぼ絶版であった」⁽⁷⁾と述べているが、その間、『フランケンシュタイン』は英語

圏の人々の想像力の中でいったいどのように命脈を保ち続けたのか。

イギリスにおいては、スタンダード・ノヴェルズ版の後、1847年にパーラー・ライブラリー版がホジソン社から出版され、その海賊版が1856年に出版された。1865年には北イングランド、ハリファックスにあるミルナー・アンド・ソワビー社から出版されたが、これら二版についてはまだ調査はできていない。1880年代に、同じくミルナー社からコテッジ・ライブラリー版が出版されたと推測されているが、この版は広告が見つかるだけであいにく残存していない。⁽⁸⁾

アメリカの出版界が作品の存続に寄与した可能性がないわけではない。RCのWebサイトによると、アメリカでは、1869年にボストンのセヴァー・フランシス社が、その後、1879年に著作権が終了すると、1880年代には、J. W. ロヴェル社、ジョージ・マンロー社、R. ワージントン社が競うように『フランケンシュタイン』を出版した。ただし、残念ながら現時点では、それらが初版、第2版、第3版のうち、どの版のテキストに基づいていたかなどの詳細は不明である。

少し戻って1845年になるが、ニューヨークの出版社ヘンリー・G・ダガーズ社はパーク・ベンジャミン編によるニューライブラリー・オブ・スタンダード・ノヴェルズというシリーズの出版を始め、その第1巻として『フランケンシュタイン』の1818年版テキストを出版した。印刷部数は不明であるが、大英図書館所蔵のダガーズ版は、パーシー・ビッシュ・シェリーによる1818年の序言とメアリー・シェリーによる1831年の序文を収録している。同書籍には「アメリカ版によせる序言」が付けられ、出版の経緯が語られている。そこには、アメリカでは、1833年のケアリー・リー・アンド・ブランチャード (Carey, Lea and Blanchard) 社によるリプリント版が幅広く読まれてきたが「質の悪さに見合わない法外な値段」で売られて、以後入手困難が続き、ついにアメリカでは入手不可能となったと記されている。そして、読者からの問い合わせが絶えないため、完全版を探して新シリーズの第1巻として読者に『フランケンシュタイン』を供するに到ったと語

られている。裏表紙にはシリーズ刊行の辞が掲載され、新シリーズでは「読者の賞賛により評価が確立された」あるいは「文学の女神のもっとも良質でもっとも純粹な靈感にも比肩する」ような「興味深く、非の打ち所がないロマンス」を刊行予定であると謳い、出版ビジネスに参入してまもないダガーズ社の意気込みをうかがわせる。⁽⁹⁾

当時のメアリ・シェリーに対する文学的評価はどのようなものだったのか。それを垣間見ることができる資料として、19世紀半ばにアメリカ、フィラデルフィアで発行されていた貸本屋の週刊誌と思われる『スミス・ウィークリー』(Smith's Weekly Volume. Select Circulating Library for Town & Country, Containing the Best Popular Literature)がある。『スミス・ウィークリー』誌は、「イングランドの女性文学者たち」(Literary Ladies of England)と名付けたシリーズにおいて、ジェイン・オースティン、ハナ・モア、アン・ラドクリフ、シャーロット・スミス、ヘスター・シャボン等、著名なイギリス女性作家の生涯と著作を紹介しており、1845年4月9日版では、シェリーの母メアリ・ウルストンクラフトを紹介している。しかし、ウルストンクラフトの生涯を5ページにわたって詳述する一方で、娘シェリーについてはわずか最後の数行に、地中海で溺死した詩人パーシー・ビッシュ・シェリーの妻であり、今も存命で、「母の名と才能を受け継いだ」と述べているだけで、その作品には一切言及はない。十九世紀半ばのアメリカにおいては、作家メアリ・シェリーも『フランケンシュタイン』もほとんど評価されていなかったことがうかがわれる。⁽¹⁰⁾

『スミス・ウィークリー』誌は、翌1846年に『アングロ・アメリカン』誌と合併することになるが、合併前の1845年5月3日版で『アングロ・アメリカン』誌は、ダガーズ社版の出版予告を掲載している。そこでは、『フランケンシュタイン』は、「偉大な想像力の産物。賛辞を繰り返すまでもなく、舞台上で鮮やかに描出されてきた傑作」と賞賛している。⁽¹¹⁾ 舞台化されたアダプテーションの受けた評価は、原作の文学的評価とはどのように異なっていたのだろうか。

3. 舞台の『フランケンシュタイン』

1823年8月、父ウィリアム・ゴドウィンGodwinの監修により、ウィットエイカー社から2巻本の第二版『フランケンシュタイン』が刊行された。著者メアリ・シェリーの名前を初めて明記した版である。だが、第二版も、発行部数は500部にとどまったと推測されている。⁽¹²⁾ 刊行は、イタリアにいる娘メアリ・シェリーに代わってウィリアム・ゴドウィンGodwinの企画・編集によった。前年6月にメアリーは流産のため危篤状態に陥り、翌7月には夫パーシー・ビッシュがイタリアの湖で溺死していた。

1823年2月18日付のメアリ・シェリー宛書簡の中で、ゴドウィンは、「『フランケンシュタイン』はどこどこの誰でも知っているし、大衆受けすることはないだろうが、あらゆるところで敬意を払われている」と賞賛している。⁽¹³⁾ シェリーは、この時期、夫の死去によって経済的不安を抱えており、また幼い息子を引き取ろうという義父サー・ティモシーの申し出によりトラブルの渦中渦中にあった。娘の文学的才能を評価するゴドウィンGodwinの賛辞はこの時点では、慰めのためであったかもしれない。だが、半年後の8月にシェリーが帰国した時には賛辞は事実となっていた。

なんということでしょう。私は有名になっていました。F [『フランケンシュタイン』] は芝居として途轍もない成功を遂げ、イングリッシュ・オペラハウスで23夜連続で上演されるどころだったのです。芝居の広告ビラは傑作でした。登場人物リストの中に「T. クック氏演じるところの——」とあったのです。名もない存在を名付けるこの方法はなかなかうまいものです。⁽¹⁴⁾

この引用は、1823年8月29日に観劇にでかけたシェリーが、同年9月9日、友人リー・ハントに書き送った書簡である。『フランケンシュタイン』は舞台版の成功によって、世間に広く知れ渡ることになった。変化をもたらしたのは、舞台化された翻案、すなわちリチャード・ブリンズリー・ピー

ク作『驕り、もしくはフランケンシュタインの運命』(*Presumption; or, the Fate of Frankenstein*)であった。⁽¹⁵⁾ 1823年7月28日にロンドンのイングリッシュ・オペラハウスでの上演が始まると、たちまちに人気が沸騰し、最初のシーズンだけで37回上演される成功を収めたという。⁽¹⁶⁾ 帰国して間もないシェリー自身も、父ゴドウィンとともに鑑賞し、原作で名前をもたないクリーチャーの役名が「——」と案内のビラに表記してあることを面白がっている。

この時点で、小説『フランケンシュタイン』がまだ第一版、第二版合わせて千部しか出版されていないことを思い起こせば、『驕り』の果たした役割の大きさが推察できよう。小説第三版が出版・増刷されたのは1831年から1849年の間であったが、『驕り』は、その後1850年代に到るまで繰り返し上演された。脚本は1865年に出版され、その後もアマチュア演劇のために廉価版が出版され続けたという。⁽¹⁷⁾

『驕り』の他にも、舞台化されたアダプテーションは存在した。『フランケンシュタイン、あるいは生き写しの男』(*Frankenstein, or The Model Man*)は1849年にロンドン、ウェストエンドで54回上演された。1826年初演の『人と怪物、あるいはフランケンシュタインの運命』(*The Man and the Monster; or, The Fate of Frankenstein*, 後に*Frankenstein, or, The Monster*に改題)も1840年代まで頻繁に上演されたあと、1850年代にバーミンガム、エディンバラなどの地方都市で上演された。脚本は1826年に出版され、その後、1867年に再版された。⁽¹⁸⁾

1831年の第三版出版以降、特に1850年代から70年代にかけての「ほぼ絶版」であった時期、すなわちテキスト版の空白時代において、『フランケンシュタイン』が大衆の想像力の中に生き続けるために大きな役割を果たしたのは、ヴィクトリア朝初期から中期にかけて劇場で上演された翻案も含めた複数の舞台版アダプテーションであったと言ってもよい。

3. 「新造物者」とRoutledge's World Library (RWL) 版

「新造物者」の翻訳の底本を特定するためには、最初に、1818年出版の初版をベースとしているか、1831年出版の第三版をベースとしているかを見きわめる必要がある。メアリ・シェリー自身が序文をつけ、改訂を行った1831年出版の第三版は、スタンダード・ノヴェルズ版である。初版と第三版の簡便な判別方法は、第1章の半ば、ヴィクターの両親が家族の一員として育て、やがてヴィクターと結婚するエリザベスがフランケンシュタイン一家とともに暮らすことになる経緯を書いた部分である。1818年の初版では、エリザベスはヴィクターの父親の妹の忘れ形見という設定になっていたが、1831年版では、イタリア旅行をした際に、母親がとある貧しい農家で見出した高貴の生まれの孤児という設定に変更されている。「新造物者」においては、連載第2回にイタリアのコモ湖のほとりで「如何にも難渋に暮らす百姓夫婦あり。飢ゑ疲れたる五人の子供に、僅計の食物を与へて居りしが、其の中に、一人目立て美しき女の子あり」、その幼女を貰い受けたと書かれており、底本の候補から1818年版は除外してよさそうである。

著作権による保護期間が終了した1879年以降は、『フランケンシュタイン』は大量に市場に出回り始めた。一つには、1884年に数十万部単位で大量に印刷されたはずとセントクレアが述べるディックス・イングリッシュ・ライヴラリ・オブ・スタンダード・ワークス (Dick's English Library of Standard Works) というシリーズに第3巻として収められたものがある。現存する書籍は希少だが、ニューヨーク公共図書館のデジタル・コレクションではその表紙が確認可能である。表紙の中央には、紙面全体のほぼ3分の2を使って挿絵が置かれ、天蓋ベッドのカーテンを上げて侵入しようとするクリーチャーと、ベッドに横たわり驚愕するヴィクターが描かれる。挿絵の左右の欄にはテキストが配され、1818年版に添えられたパーシー・ビッシュ・シェリーの序言に続いて、原作の幕開けと同じく「17—年12月11日」付のロバート・ウォルトンの第一書簡が収められている。

ディックス・イングリッシュ・ライヴラリ・オブ・スタンダード・ワークスに加えて、1880年代の『フランケンシュタイン』普及に大きな役割を果たしたと思われるのは、ラウトレッジ社が矢継ぎ早に出版した複数の廉価版の読み物シリーズである。大英図書館およびボードリアン図書館での調査によって、少なくとも以下の3シリーズに『フランケンシュタイン』が収録されていることが明らかになった。この中に底本の候補を見い出すことができる。

3シリーズとは、①大判シックスペニー・ノヴェルズ (Routledge's Large-Size Sixpenny Novels) の第159巻 (1882年版をボードリアン図書館が所蔵、大英図書館の所蔵は未確認)、②ワールド・ライブラリー第25巻 (1886年版を大英図書館所蔵)、③ポケット・ライブラリーの第31巻 (1888年版を大英図書館所蔵) である。

①の大判シックスペニー・ノヴェルズは、広告によると8.5インチ (約21.6cm) × 5.5インチ (約14cm) と縦長の判型で、表紙にはアルプスの氷の海で出会うクリーチャーとヴィクターの遭遇が描かれている。②1886年出版のワールド・ライブラリー (Routledge's World Library, 以下RWL版と略す) は、ウォルター・クレインの表紙デザインによる紙装版3ペンス、布装版6ペンスで販売された。シリーズ編者でもあるH. R. ハウエイ (H. R. Haweis) 牧師によるシリーズ解説と作品解説が加えられている。テキストは1831年版を使用し、各章の一部分が省略された簡約版となっている。③ポケットライブラリーには、1831年版が収録されている。

「新造物者」は明治22 [1889] 年6月に、『國のもとゐ』の第1巻第3号に掲載され、以後、全7回に分けて連載された。ところが、先述した通り、『國のもとゐ』は、明治23 [1890] 年3月に予告なく廃刊となった。こうした事情を反映して、第1回から第6回までは、大胆な省略や要約を取り入れながらも原作の第一巻に即している一方、最終回の「新造物者」は、一気に原作第2巻の始めから終わりまでを駆け足でまとめており、中にはまる

まる一章分を一文に縮小する荒技も含まれる。このように第7回は、翻訳の底本を特定するための参考にはなりがたい。筆者は現在、最終回を除いた第6回までの連載に絞って、『フランケンシュタイン』1831年版、RWL版の1831年版抄訳、そして「新造物者」という3種のテキストの比較を行っている。

現段階で、「新造物者」は底本として、おそらくRWL版を採用し、省略・改変をさらに加えた作品である可能性が高いと思われることがわかった。RWL版が底本である根拠としてもっとも有力と思われるのは、すでに精査の終わった原作第1巻第4章までについて、RWL版が1831年版原作から省略した箇所が、いずれも「新造物者」のテキストには含まれていない点である。RWL版におけるもっとも顕著な省略は、原作第1巻冒頭のロバート・ウォルトンの4通の書簡中、最初の2通の省略である。このため、RWL版は「第1書簡」と書き換えられた原作第3書簡から始まっている。

「新造物者」では、原作にはない以下の口上が添えられ、続く物語は同じく原作第3書簡から始まる。

此の小説は、英人フランケンシュタインと云ふ者、學理上より、人類を製出したるが、即て、眞の人間の如く、活動言語したる談話を、綴り出したるなり。故に、標題をば、新造物者と名く。但、其の第一なる書状は、甚だ煩はしきに似たれど、全く、全篇の発端なれば、読者、宜しく、其の心したまへ。(19)

口上は、原作ではジュネーヴ生まれの語り手ヴィクターを「英人」すなわちイギリス人とする間違いも含むが、「學理上より、人類を製出したるが、即て、眞の人間の如く、活動言語したる談話を、綴り出したるなり」と述べており、科学的発明と人類の叡智というテーマを前面に出して、啓蒙主義に則った新しい女子教育を標榜する東京高等女学校教員が中心となって刊行した『國のもと』にふさわしく、高揚した語調で連載の開始を告げ

ている。

冒頭の手簡2通の省略以外では、RWL版は基本的にパラグラフ全体の省略、あるいはパラグラフの前半/後半の省略のように、ある程度のまとまりを省略する方針を採用している。「新造物者」では、RWL版で省略された箇所はいずれも省略されているほか、たとえば、冒頭の手簡中、RWL版では省略されていない宛名「サヴィル夫人、イングランド」と日付「17—年、7月7日」を省略するなど、さらなる省略を加えている。

一方で、「新造物者」には、RWL版の原文を要約したり、原文にはない説明を補足している場合も多く見られる。以下、ウォルトンの2通の手簡に続く第1巻第1章、第2章それぞれから1箇所ずつ、省略部分が複雑に入り組んでいる箇所を選んで、「新造物者」の翻訳とRWL版を比較し、二つのテキストに相関関係が認められることを確認したい。

第1巻第1章についてRWL版と「新造物者」を比較すると、RWL版では、ヴィクターがロバート・ウォルトンに生い立ち——具体的には、両親の出会いと結婚の経緯、5歳になるまで一人っ子として育ったこと——を語る原作の同章第2段落冒頭（As the circumstances of his marriage…）から、同じく第7段落目（… I was guided by a silken cord that all seemed but one train of enjoyment to me.）の6段落が省略されている。「新造物者」にはRWL版が省略した箇所と同じ6段落の省略が見られるのに加えて、第1段落が抄訳され、さらに1-3文程度の文、句や節といった細かい単位での削除が見られる。

原作第1巻第2章については、RWL版は、冒頭の段落と章末の二箇所には大きな省略を施している。特に重要なのは章末の省略で、原作では「私が15歳の頃」から始まる章末4段落が、RWL版では省略されている。この結果、庭の樫の大木が雷に打たれて根元だけを残して消えるのを見たというヴィクター15歳のときの重要なエピソード全体が作品から消されている。この省略によって、それまで貪るように読んでいた錬金術を似非科学として否定し、ヴィクターが近代自然科学に関心を傾けるようになった

契機が作品から失われている。省略された箇所は、「電気」そして「ガルヴァニズム」という人工生命をめぐるキーワード二つが初めて作品に登場する場面でもあったが、それも消えた。これら章末4段落の省略によって、RWL版では、原作誕生の契機でもあった電気とガルヴァニズムと作品テーマのかかわりが曖昧になっている。

新たなRWL版第2章の結びは、章末4段落の削除に伴って、「私の思考回路をふたたび転換させる出来事が起きた」という一文となっている。この「出来事」がもともと指していた15歳のときの榎の木のエピソードが消えてしまったために、作品解釈も影響を受けることになった。すなわち、RWL版では「出来事」は、榎の木のエピソードではなく、次の第3章冒頭に語られる17歳のときの母親の病死とする解釈以外は成立しなくなったのである。

「新造物者」にも、RWL版と同じく、冒頭の段落と章末4段落の省略があり、少年ヴィクターが大樹が雷に打たれて倒れたことに衝撃を受ける場面、およびその出来事が引き起こす近代自然科学への覚醒は省略されている。訳者が付け足した「新造物者」前言にうかがえる近代科学への期待が、開明的な『國のもとゐ』に掲載する翻訳作品として『フランケンシュタイン』を選ぶ際の決め手になったとすれば、榎の木のエピソードは重要なはずで、その欠落は理解しがたい。だが、もしこのエピソードをそもそも割愛していたRWL版が翻訳の底本に使われたとすれば、「新造物者」の訳者の判断が問われることにはならない。

ただし、以上のような省略の結果として、「新造物者」においては、ヴィクターが生命創造の探究を始める動機は、科学者の脳裏に「不図」——つまり偶然あるいは思いつきで——生じた気まぐれな好奇心として描かれることになったことには注意が必要であろう。

さて目的の学課も、一通りは業を卒へければ、一度本国に立帰らんと思ひしが、不図人間の身体の構造の事に就て、考へを起こしつゝ、

凡そ人の生活と云ものは、如何なる道理に拠るものぞと云ふ探索に取掛かれり、この事は元来大胆にして不思議なる問題なるが、世間の学者は、不注意、及び勇氣の不足なるよりして、物の真理の発見を失策する者多きなり。(「新造物者」傍点筆者)⁽²⁰⁾

『フランケンシュタイン』1831年版、RWL版の1831年版抄訳、そして「新造物者」の翻訳の3種のテキストの比較は、今後第1巻後半について分析を進める予定であるが、第1巻第5章から第2巻にかけてのRWL版の省略箇所は比較的少なく、現段階において、RWL版が、「新造物者」底本である蓋然性は高いといつてよいのではないかと思われる。

メアリ・シェリーに宛てた1823年の手紙でゴドウィンが書いた「『フランケンシュタイン』はどこ誰でも知っているし、大衆受けすることはないだろうが、あらゆるところで敬意を払われている」ということばは、予言的であると同時に反予言的でもあった。すでに見てきたように、「大衆受けすることはない」という言葉は見事に裏切られ、1850年代から70年代にかけて、作品が絶版になった間も、舞台版は継続した。さらに1879年に著作権保護期間が終了した後は、『フランケンシュタイン』はもう一度「大衆」に助けられることになる。新読者層である下層中産階級と労働者階級向け読み物のかつてない出版ラッシュを迎えたイギリス出版界において、教化の目的にふさわしい作品として、繰り返し廉価版シリーズに収録されたのだ。

遠く海を渡って、開国まもない東の島国にたどり着いたその伝播性は、『フランケンシュタイン』という作品のもつ力を再認識させるが、同時に、初邦訳「新造物者」が途絶した理由もまた、明治中期の新たな女子教育のあるべき方向性をめぐる課題の存在をつきつけている。その検証に向けて、今後さらに執筆を継続したい。

注

- (1) 『新造物者』の重要性と出版をめぐる複数の謎の存在を初めて指摘したのは、横田順彌「『猿乃裁判』と『新造物者』」（『SFマガジン』（561）2003、『近代日本奇想小説史』2011所収）。『フランケンシュタイン』の多様なアダプテーションを論じた武田悠一・武田美保子『増殖するフランケンシュタイン』（2017）も「新造物者」について論じているが、横田順彌を踏襲して謎の存在を述べるにとどまっている。
- (2) 田辺龍子（三宅花圃）は、「新造物者」連載開始の前年に小説『藪の鷺』を発表。その後作家として活躍し、小説に加えて数点の翻訳も残している。田辺龍子を「新造物者」の翻訳者と推論する根拠としては、当時東京高等女学校に在籍しており、『藪の鷺』の刊行により別格に扱われる存在であったこと、「ひさご」を雅号としていたこと、『藪の鷺』草稿を翻訳家としても知られる坪内逍遙に添削してもらったことなどがある。父親は旧幕臣で、岩倉遣欧使節団に一等書記官として加わった外交官田辺太一、若くして亡くなった兄の次郎一は三井物産ロンドン支店長として赴任するなどイギリスとの接点もあった。拙著“Meiji Japan Responds to *Frankenstein*: the 1889-1890 translation ‘The New Creator’ and the illustrations”を参照。
- (3) “Mary Shelley.” *Orlando*. Cambridge UP. Accessed March 23, 2022. 同データベースは、「全集、評価」の項目において、メアリ・シェリーの学問的評価の定着は、1996年にピカリング・マスター・シリーズとして刊行されたノーラ・クルック他編*The Novels and Selected Works of Mary Shelley* 全8巻、2002年からラウトレッジ社から刊行されたノーラ・クルック編*Mary Shelley’s Literary Lives and Other Writings* 全4巻などによると記している。データベース*Literature Online*によると、メアリ・シェリーに関する研究論文ならびに研究書の件数は、1970年代は71件、80年代は112件と徐々に増えたが、90年代は496件、2000年代は

754件、2010年代は935件と1990年代から顕著な増加を示している。

- (4) 東京高等女学校閉校の経緯と日本における女子教育史におけるその意味については、近刊の拙論“Meiji Japan Responds to *Frankenstein*”を参照のこと。
- (5) 『フランケンシュタイン』の多様なエディションについては、以下を参照。William St Clair, *The Reading Nation*, Appendix 9; William St Clair, “The Impact of *Frankenstein*”; “Study Aids: Editions of Mary Shelley’s *Frankenstein*,” *Romantic Circles*. Stuart Curran編による *Frankenstein: The Pennsylvania Electronic Edition*の“The Text: Major Editions and Translations”は、1996年までの主要なエディション・リプリント・翻訳を収録している。なお、ポピュラーカルチャーにおける『フランケンシュタイン』のアダプテーションについてはセントクレアの両著作ほか、*The Cambridge Companion to Frankenstein*のPart III “Adaptations”の各章に詳しい。
- (6) 初版の売れ行きについて、セントクレアは、当初は好調であったという見解をとっていたが (“The Impact of *Frankenstein*,” p. 43), 後に否定している (*The Reading Nation*, p. 635, n. 36)。ダイアン・ハウヴェラーも初版の売れ行きはかんばしくなかったとの立場をとり、トマス・ラヴ・ピーコックがパーシー・ビッシュ・シェリーに宛てて『フランケンシュタイン』が「どこでも知られており、読まれている」と書いたことに言及しつつも、実は『フランケンシュタイン』の書評は毀誉入り混じり、売れ行きは緩慢であったために増刷には至らなかったと結論づけている (Hoeveler, p. 175)。一方、*Rob Roy*の初版一万部刊行は、当時としては異例の事態であった。一つの理由は、当時、スコットランドで小説人気が高まったことである。ピーター・ガーサイドは、スコットランドでの小説（特にウォルター・スコット）人気が高まりを原因と分析している (Garside, p. 205)。*Rob Roy*初版のうち、首都ロンドンに送られたのは約3分の1ほどで、グラスゴーを中心と

するスコットランドでの売上げが中心であったという。さらにガーサイドは、19世紀初めに専門職およびミドルクラスの住民層がエジンバラのニュータウンに集中し、さらに郊外へと拡散したこと、蔵書の7割を小説とする新しいスタイルの貸本屋が開店したことなど、この時期スコットランドで小説が家庭で読むにふさわしい「リスペクタブル」なジャンルとして読者に受容され始めたことと指摘している。なお、*Rob Roy*を皮切りに、スコットの小説は1824年の*Red Gauntlet*まで、初版1万部刊行が続いた (*The Reading Nation*, pp. 637-39)。

- (7) St Clair, *Reading Nation*, p. 645.
- (8) ミルナー社のコテッジ・ライブラリーのリプリント版という *Frankenstein: The Modern Man-Demon* がインターネット上で稀覯本として出品された例がある。Toovey's Antique Art Auctioneer&Values. Lot. 355. 11 November 2020. Accessed 20 March 2022. [https:// www.tooveys.com/lots/431644/shelley-mary-wollstonecraft-frankenstein-the-modern-man-demon-london-milner/](https://www.tooveys.com/lots/431644/shelley-mary-wollstonecraft-frankenstein-the-modern-man-demon-london-milner/) 同リプリント版タイトルはニューヨーク公共図書館にも所蔵がある。Call Number : Pforz (Shelley, M. *Frankenstein*. 1874-1883?).
- (9) Mary W. Shelley, *Frankenstein; or, the Modern Prometheus*, ed. Park Benjamin, New Library of Standard Novels, No. 1, N. Y.: Henry G. Dagggers, 1845. 大英図書館所蔵。
- (10) ウルストンクラフトの紹介は、同誌234-238頁に掲載。末尾に以下のようなメアリ・シェリーの紹介がある。"The child whose birth was the cause of her mother's death, and who inherited her name and talents, still lives, and is the widow of the celebrated poet, Percy Bysshe Shelley, who was drowned in the Mediterranean in 1822."
- (11) "Frankenstein, or the Modern Prometheus—By M. W. Shelley—N. York: Dagggers—A work of imagination so great, and which has been so graphically illustrated on the stage, needs no farther

- comment in its favor” (43). *The Anglo American: A Journal of Literature, News, Politics, the Drama, Fine Arts, Etc.* Vol. V, New York: E. L. Garvin & Co., 3 May 1845.
- (12) St Clair, “The Impact of *Frankenstein*,” p. 57. *The Reading Nation*では第二版の推定出版部数は削除されている。
- (13) “Your talents are truly extraordinary. *Frankenstein* is universally known, and though it can never be a book for vulgar reading, is everywhere respected. It is the most wonderful work to have been written at twenty years of age that I ever heard of.” *Mary Shelley*, edited by Harold Bloom, p 16.
- (14) リー・ハントへの書簡。 *The Letters of Mary Wollstonecraft Shelley*, ed. Betty T. Bennett, Vol. 1, Baltimore and London: The Johns Hopkins University, 1980, p. 378.
- (15) 舞台上上演された複数の翻案については、ホウヴェラーが詳しい。Hoeveler, pp. 177-178, 181. *Presumption* のテキストはRCおよびネブラスカ＝リンカン大学のWebサイトで読むことができる。 <https://romantic-circles.org/editions/peake/>
University of Nebraska-Lincoln. Accessed March 15 2022.
<https://english.unl.edu/sbehrendt/texts/Presumption/presump.htm>
Accessed March 15 2022.
- (16) St Clair, *The Reading Nation*, p. 646.
- (17) St Clair, *The Reading Nation*, p. 646. 舞台用の翻案およびその上演史については、セントクレアのほか、ホウヴェラーおよびホウヴェラーが依拠したフォリーに詳しい。Stephen Earl Forry, “Dramatizations of *Frankenstein*, 1821-1986: A Comprehensive List, English Language.”
- (18) St Clair, pp. “The Impact of *Frankenstein*,” pp. 60-61.
- (19) 『國のもとゐ』第1巻第3号, 明治22 [1889] 年6月。

(20) 『國のもとゐ』第1巻第4号, 明治22 [1889] 年7月。

引用文献

武田悠一・武田美保子 『増殖するフランケンシュタイン』彩流社, 2017年。
瓠廼舎主人「新造物者」『國のもとゐ』I: 3 (1889)-II: 12 (1890)。

横田順彌 「『猿乃裁判』と『新造物者』」『SFマガジン』(2003) 561頁。

——. 『近代日本奇想小説史』ビラールプレス, 2011年。

Bennett, Betty T., editor. *The Letters of Mary Wollstonecraft Shelley*.

Baltimore and London: The Johns Hopkins University, Vol. 1, 1980.

Bloom, Harold, editor. *Mary Shelley*. Bloom's Classic Critical Views.

Chelsea House Publishers, 2008.

Carl H. Pforzheimer Collection of Shelley and His Circle, The New York

Public Library. "Frankenstein; or, The Modern Prometheus," The

New York Public Library Digital Collections. 1884-10-22. Accessed

29 March 2022. [https://digitalcollections.nypl.org/items/77aeac70-](https://digitalcollections.nypl.org/items/77aeac70-1fe2-0136-31ed-19cf55cd5442)

[1fe2-0136-31ed-19cf55cd5442](https://digitalcollections.nypl.org/items/77aeac70-1fe2-0136-31ed-19cf55cd5442)

Curran, Stuart, editor. "The Text: Major Editions and Translations."

Frankenstein; or, the Modern Prometheus by Mary Wollstonecraft Shelley:

The Pennsylvania Electronic Edition. Accessed 30 March 2022. [http://](http://knarf.english.upenn.edu/index.html)

knarf.english.upenn.edu/index.html

——, editor. "Texts: 1831 edition. Frankenstein by Mary Wollstonecraft

Shelley." *Romantic Circles*. 2009. Accessed 28 March 2022. [https://](https://romantic-circles.org/editions/frankenstein/1831_contents.html)

romantic-circles.org/editions/frankenstein/1831_contents.html

Forry, Stephen Earl. "Dramatizations of *Frankenstein*, 1821-1986: A

Comprehensive List, English Language." *English Language Notes*, 25: 2

(December 1987), 63-79; rpt. *Frankenstein; or, the Modern Prometheus*

by Mary Wollstonecraft Shelley: The Pennsylvania Electronic Edition, edited

- by Stuart Curran. Accessed 29 March 2022.
<https://knarf.english.upenn.edu/Articles/forry2.html>
- Garside, Peter. "Literature in the Market Place: The Rise of the Scottish Literary Market." *Edinburgh History of the Book in Scotland*, Vol. 3, edited by Bill Bell.
- Hoeveler, Diane Long. "Nineteenth-Century Dramatic Adaptations of Frankenstein." *The Cambridge Companion to Frankenstein*, edited by Andrew Smith, Cambridge UP, 2016, pp. 175-89.
- "Mary Shelley." *Orlando*. Cambridge UP. Accessed 23 March 2022.
<https://orlando.cambridge.org/profiles/shelma>
- Nakagawa, Tomoko. "Meiji Japan Responds to *Frankenstein*: the 1889-1890 translation 'The New Creator' and the illustrations." *Afterlives of Frankenstein: Popular and Artistic Adaptations and Reimaginings*. Edited by Elizabeth A. Fay and Robert I. Lublin, Bloomsbury Press, 2023 (forthcoming).
- Peake, Richard Brinsley. "Presumption; or, the Fate of Frankenstein," edited by Stephen C. Behrendt, *Romantic Circles*. Accessed 20 March 2022. <https://romantic-circles.org/editions/peake/>
- . "Presumption; or, the Fate of Frankenstein." University of Nebraska-Lincoln. Accessed 20 March 2022.
<https://english.unl.edu/sbehrendt/texts/Presumption/presump.htm>
- St Clair, William. "The Impact of Frankenstein." *Mary Shelley in Her Time*, edited by Betty T. Bennett and Stuart Curran, Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 2000, pp. 38-63.
- . *The Reading Nation in the Romantic Period*. Cambridge UP, 2004
- Shelley, Mary W. *Frankenstein; or, the Modern Prometheus*, 1831. Edited by Stuart Curran. *Romantic Circles*. 2009. Accessed 29 March 2022.
https://romantic-circles.org/editions/frankenstein/1831_contents.

html

- . *Frankenstein; or, the Modern Prometheus*. Edited by Park Benjamin, New Library of Standard Novels, No. 1, N. Y.: Henry G. Dagers, 1845. The British Library.
- . *Frankenstein; or, the Modern Prometheus*. Routledge's Large-Size Sixpenny Novels. London: Routledge, Vol. 159, 1882. The Bodleian Library, Oxford.
- . *Frankenstein; or, the Modern Prometheus*. Dick's English Library of Standard Works, 1884. The New York Public Library Digital Collections. Accessed 29 March 2022.
<https://digitalcollections.nypl.org/items/77aeac70-1fe2-0136-31ed-19cf55cd5442>
- . *Frankenstein; or, the Modern Prometheus*. Edited by H. R. . Haweis, Routledge's World Library, Vol. 25, London: Routledge, 1886. The British Library.
- . *Frankenstein; or, the Modern Prometheus*. Routledge's Pocket Library. Vol. 31. London: Routledge. 1888. The British Library.
- . *The Letters of Mary Wollstonecraft Shelley*. Edited by Betty T. Bennett, Baltimore and London: The Johns Hopkins University, Vol. 1, 1980.
- “Shelley, Mary Wollstonecraft, 1797-1851.” *Literature Online*. Accessed 7 May 2022. <https://www.proquest.com/encyclopedias-reference-works/shelley-mary-wollstonecraft-1797-1851/docview/2137900489/se-2?accountid=14671>
- Smith, Andrew, editor. *The Cambridge Companion to Frankenstein*. Cambridge: Cambridge UP, 2016.
- Smith's Weekly Volume for Town & Country*. 9 April 1845. Philadelphia. Accessed 25 March 2022.
<https://books.google.co.uk/books?id=joE3AQAAMAAJ&pg=PA234>

&lpg#v=onepage&q&f=

“Study Aids: Editions of Mary Shelley's *Frankenstein*.” *Romantic Circles*.
Accessed 29 March 2022.

<https://romantic-circles.org/editions/frankenstein/textual.html>

The Anglo American: A Journal of Literature, News, Politics, the Drama, Fine Arts, Etc. Vol. V, New York: E. L. Garvin & Co., 3 May 1845. Accessed
28 March 2022.

https://books.google.co.jp/books?redir_esc=y&hl=ja&id=APQ-AQAAMAAJ&q=1845+May+21#v=onepage&q=Frankenstein%201845&f=false

